

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	中村 徳仁
論文題目	反政治の黙示録としての哲学と宗教——シェリング政治哲学研究序説		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、長らくフィヒテとヘーゲルのあいだを繋ぐ自然哲学者、あるいはきわめて神秘主義的な宗教思想家と見なされてきたシェリングの思想を、とくに英語圏におけるシェリング研究の最新の動向を踏まえて、「(反)政治」という特徴をもった政治思想家としてあらためて浮き彫りにしようとする研究である。扱われている範囲は、シェリングの最初期から晩年の『啓示の哲学』にいたるまで、シェリングの思想家としての全生涯に及んでいる。本論文は、以下のとおり、序論、第1章、第2章、第3章、第4章、結論から構成されている。</p> <p>「序論 正統と革命のはざまに立つシェリング——先行研究の整理」では、シェリングの政治思想に関する、1950年代から2010年代までの先行研究が4段階に分けて整理されている。大きくは保守・反動の政治思想家と見なされた時期、むしろマルクスの唯物論の萌芽をもつものと見なされた時期、その根本思想が問いなおされた時期、独自の終末論的メシアニズムの視点で問い返された時期である。そのうえで、本論文の3つの主要テーゼが掲げられている。すなわち、A：シェリングの「(反)政治」は、「独断主義(信)」と「批判主義(知)」のあいだには広大な余地があり、そのはざまにこそ「人間的自由の本質」が在ることを喚起する、B：シェリングの「(反)政治」は、国家の存在を必要悪として認めつつ、「思考の自由」の絶えざる行使によって国家秩序の神政化を牽制する、C：シェリングの「(反)政治」は、〈いま・ここ〉に潜む未来への道を哲学的に模索し、人格の完成へと向かう人格主義とユートピア的終末論を特徴とする、である。</p> <p>本論文では考察すべきシェリングのテキストを以下の三つに分類している。すなわち、①政治について明示的に言及した著作、②政治について言及していなくても政治的な意図をもった著作、③結果として政治的な影響を与えた著作、である。</p> <p>第1章「新しい神話とその前史——若き日のシェリングを取り巻く言説状況」では、シェリングの思想形成に対して時代が与えた影響が考察されている。主に論じられているのは、産業革命とフランス革命といった政治史的・社会史的背景、啓蒙主義とロマン主義、さらに敬虔主義といった思想史的背景である。これが以下の論述の基礎となっている。</p> <p>第2章「ラディカルに開かれた「同一性」をめぐる思考——完成と個性とのあいだの葛藤」では、テーゼAを論証するために『独断主義と批判主義にかんする哲学書簡』(1795年頃)、『哲学と宗教』(1804年)、『人間的自由の本質』(1809年)、「学としての哲学の本性について」(1820年頃)といった主要著作、政治的な事柄が直接言及されてい</p>			

い著作が概観され、シェリングの哲学が、独断主義と批判主義、信仰と知、宗教と哲学のあいだで、諸対立を架橋する自由な思索の可能性を求めていたことを明らかにしている。

第3章「国家の中の居心地の悪さ——必要悪としての法と政治」では、テーゼBを論証するために、シェリングが明示的に国家や政治について論じた箇所を含む著作、すなわち、『自然法の新演繹』（1796/97年）、『超越論的観念論の体系』（1800年）、『学問研究の方法にかんする講義』（1803年）、『シュトゥットガルト私講義』（1810年）、『神話の哲学』（1840年代以降）を、順次検討している。その際、従来強調されてきた「断絶」や「変化」においてではなく「連続性」に着目し、シェリングが政治や国家を「必要悪」として認めつつも、それが人間の生に全面的に浸透してくることにたいしては一貫して抵抗を示してきたと論じている。

第4章「ケノーシスの終末論としての哲学的宗教——『啓示の哲学』の「未来」」では、テーゼCを論証するために、シェリングの政治哲学のアクチュアリティを強く打ち出しているダスの研究を導きとしながら、シェリングの後期を代表する『啓示の哲学』（晩年の講義と草稿群からなる）を、「哲学的宗教」と「ケノーシス（キリストが自らの神性を放棄して人間となること）」という概念に着目して、独特の終末論として読み解いている。その際、ダスをはじめ先行研究で注目されてこなかった『啓示の哲学』の第33講義、第35講義にも考察を向けている。

「結論」では、論文の全体を振り返ったうえで、シェリングが若いころヘーゲルに宛てた書簡の一節など、前章まででは取り上げてこなかったシェリングの文章を引用しつつ、A、B、Cの3つの根本テーゼの正しさがあらためて確認されている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、シェリングを特異な政治思想家として再評価しようとする英語圏での最新の研究動向に触発されながら、それらの先行研究で「(反)政治」と特徴づけられているシェリングの政治思想を、A、B、Cの3つの根本テーゼ(各テーゼについては「論文内容の要旨」を参照)をたてて、それぞれについて丁寧に論証することによって、政治思想家としてのシェリングをその思想的生涯の全体にわたって考察したものとして、高く評価することができる。

先行研究についても、英語圏の最新のものだけでなく1950年代後半からの日本やヨーロッパの研究にも目配りをしていることは特筆に値する。あたかもアナーキスト・シェリングという評価すら示唆する英語圏の研究に対して、申請者はシェリングがあくまで「必要悪」として国家の存在を認めていたことを冷静に説いている。そのことによって、「(反)政治」の政治思想家としてのシェリングを、もっと幅広くその思想総体のなかで捉えることに本論文は成功している。

「序論」では、シェリングの政治思想に関する先行研究を4段階にわけて明快に、かつ丁寧に説明している。くわえて、本論文での主張を3つの根本テーゼとして提示する手腕に、申請者の優れた研究者としての力量を見て取ることができる。申請者がシェリングのテキストを「政治哲学」として捉える際に、①明示的に国家や政治に言及しているもの、②明示的に言及していなくても政治的意図があるもの、③政治的意図がなくても結果的に政治的影響を及ぼしたものに区分したうえで、とくに先行研究では欠落している②の部分にも力点を置いて考察しようとしているところを高く評価することができる。

第1章では、シェリングの育った知的背景を考察する際、産業革命とフランス革命といった社会的背景と、啓蒙主義とロマン主義といった文化思潮が確認されている。とくにヴェルテンベルク敬虔主義、とりわけその派の牧師ハーンとの少年の日の出会いをシェリングの知的背景として強調しているところが斬新であり、それが論文全体の伏線ともなっている。

第2章では、『独断主義と批判主義にかんする書簡』、『哲学と宗教』、『人間的自由の本質』というシェリングの3冊の主要著作、政治について明示的に言及してはいない著作を丹念に読解することによって、テーゼAをテーゼBとCの前提となるシェリングの基本的立場として論証し、独断主義と批判主義、宗教と哲学、信仰と知の「はざま」で自由な思考をもとめていたシェリングの姿を浮き彫りにしている。これは、シェリングを政治思想家として把握しようとする先行研究において欠落している部分であって、本論文でも高く評価されるべきところである。

第3章では、『自然法の新演繹』、『超越論的観念論の体系』、『学問研究の方法

にかんする講義』、『シュトゥットガルト私講義』、『神話の哲学』といった著作を対象にして、シェリングが国家と政治について明示的に言及している箇所を考察し、テーゼBを説得力をもって論証している。とくに申請者の視点が優れているのは、従来「断絶」や「変化」として跡づけられてきたシェリングの国家や政治に対する姿勢を、むしろ連続性において捉えている点である。

第4章では、シェリング晩年の講義と草稿類を集成した『啓示の哲学』を読解の対象として、テーゼCについて、印象的で説得力のある論証を行っている。その際申請者は、ダス『シェリングの政治神学』などの先行研究を参照しながらも、かつての『人間的自由の本質』の末尾で示唆されていた哲学と宗教の新たな関係を、『啓示の哲学』に登場する「哲学的宗教」のうちに探り、とくに「ケノーシス」という概念に着目して、シェリングの「哲学的宗教」の孕んでいるユートピア的様相を摘出している。いずれも申請者の鋭敏な視座を十二分に示していると言える。最新の英語圏のシェリング解釈がまるでアナーキスト・シェリングといったイメージを示唆するのにたいして、あくまでシェリングが国家を必要悪として認めていたことを冷静に確認したうえで、「(反)政治」の思想家としてのシェリングが探究されていることも、高く評価できる。

「結論」では、シェリングの若いころのヘーゲル宛て書簡の一節などを参照することによって、本論の3つのテーゼの正しさについて再確認するとともに、「(反)政治」思想家としてのシェリングの姿をあらためて強く印象づけている。

よって、本論文は博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また、令和5年1月10日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降